

藤並の森

Vol.29

高知県立文学館



●「白鷺の詩」(写真提供/松村一位)

リレー随筆②⑨ 土佐と探偵小説——森下 時男

江戸川乱歩氏が、土佐の郷土誌「南風」に「土佐と探偵小説」(昭和二九年)という随想を寄稿しています。

乱歩氏の書いているあらまは、黒岩涙香、馬場孤蝶、森下雨村の土佐出身の三人の名をあげ、涙香の翻案小説に若い頃影響を受け、孤蝶の講演に刺激され、雨村は私の処女作を直ちに認めて「新青年」に発表してくれた。

私が探偵小説家となった原動力はこの土佐の三人であるとし、土佐人の伝統と性格内には探偵小説を愛好する要素が、他国人と比べて濃厚なのであると結んでおられます。

黒岩涙香は日本探偵小説の祖。乱歩氏同様、横溝正史氏も涙香を精読され、その影響を受けました。雨村も、大先輩の涙香を外国の大作を日本のものにした天才として尊敬する文章を残しています。馬場孤蝶氏は雨村の恩師。孤蝶宅には、多くの若い文学者が教えを乞いに集まっていました。学生の雨村は孤蝶夫人が佐川町出身でしたから勝手口から出入りして孤蝶氏にお会いし、先生と門下の先輩方からかなりの影響を受けました。

今では忘れられた人ですが、その他にも探偵小説を理解する土佐人がいました。翻訳家では高知市出身の田内長太郎氏。長谷川天溪先生の弟子で英文学者。生活の糧のため探偵小説を翻訳しましたが、古典物しか訳さない頑な清貧の士でした。また、探偵小説の陰の功労者として、科学者岡崎直喜氏と

医学者井上重喜氏。ともに佐川町出身ですが、前者は、同僚の甲賀三郎氏と大下宇陀児氏の処女作を「新青年」に紹介しました。後者は、探偵小説の草創期に雨村が小酒井不木とは一体どういう人物かと照会した人で、小酒井不木氏の同窓生。不木氏もまた、乱歩の第一作「二銭銅貨」を絶賛しました。

乱歩氏の書斎の大デスクを拵えたのが冒頭の郷土誌「南風」を主宰した当時三越勤務の井上慶吉氏。イギリス十七世紀の家具を模した家宝ものと乱歩氏は記しています。高知市出身、文学好きな人でした。乱歩氏は土佐人は探偵小説を愛好する性格と伝統があるといわれましたが、その代表的愛読者は、吉田茂元首相。手許にアガサ・クリステイの原書を置いていたそうです。「セルボーンの博物館」の訳者西谷退三氏は、黒岩涙香の全著作を愛読、所蔵していましたが、全二八九冊が佐川町の青山文庫に寄贈されています。

明治大正期に、土佐人涙香、孤蝶、雨村で扉を開けた日本探偵小説の源流は、戦後江戸川乱歩氏が推理小説界を主導され、その後は広汎なジャンルに広がり、現在のミステリーをはじめホラー、スリラー、サスペンス、SFなどに多様化しました。探偵小説が大きく発展した時代の潮流を、土佐人の性格、伝統を継がれる同じ土佐出身のSF作家森下一仁氏あたりに伺ってみたい気持ちがあります。

(森下雨村次男・名古屋市在住)

◆夏の企画展紹介◆

2005年6月25日(土)～8月14日(日)
「シャーロック・ホームズの倫敦」写真展

ロンドン

書いた「大ボア戦争」が評価されナイトの爵位を与えられています。

こどもの頃にわくわくしながら読んだ物語にどんなものがあるでしょうか。

この夏、高知県立文学館では推理小説の傑作ホームズの物語を紹介します。

.....

シャーロック・ホームズは世界で最も有名な私立探偵であり、その物語が発表された十九世紀末から現代にいたるまで多くの人々を魅了し続けています。世界中で『聖書』の次に広く読まれている書



チャリング・クロス駅 (『ボヘミアの醜聞』)

作者のサー・アーサー・コナン・ドイル(一八五九～一九三〇)はスコットランド生まれで、エディンバラ大学で医学を学んだのち、一八八二年にポーツマスで開業します。はじめは患者が少なく、生活費のために暇な時間に短編小説を書いて原稿料を得ていました。一八八七年、エディンバラ大学で外科の指導を受けたジョウゼフ・ベル博士をモデルにホームズ最初の長編『緋色の習作』を発表しましたが、あまり注目されませんでした。ドイル自身も歴史小説家を目指していたため推理小説を続けて書く気は起こらなかったようで、次の長編『四つのサイン』が書かれたのは三年後でした。本業では、一八九一年にロンドンに移って眼科医

籍といわれ、熱烈なファンは「シャーロックキアン」と呼ばれています。彼らは、読書を楽しむだけにとどまらず、物語に書かれている物事をテーマに研究することによって、より深くホームズの世界を味わうことを楽しみにしています。物語の主人公の中でホームズほど研究書や伝記、辞典が刊行されている人物はいないと言っているでしょう。

として開業します。しかし、患者は一人も来ず、「ストランド」誌掲載の『ボヘミアの醜聞』に始まるホームズの短編十四作を収録した『シャーロック・ホームズの冒険』が読者から絶大な支持を得たことでドイルは作家となる決心をします。ドイルは推理小説家と評価されることを好まず、一八九三年に発表した『最後の事件』でホームズを滝壺に転落させシリーズを終わらせようとはしますが、読者からの要望は強く、一九〇二年に長編『バスカヴィル家の犬』を書き、三年からはホームズを生還させて短編を再開しています。ドイルは、一九二七年まで四十年にわたりホームズ・シリーズを書き、長編四作と短編五十六作を残しました。



外務省 (『海軍条約文書事件』)

ホームズが私立探偵となるきっかけとなった事件「マスケレウサ家の儀式」は一八七九年、ヴィクトリア朝時代のことでした。そして、一九一四年『最後の挨拶』までの三十五周年にホームズは多くの事件を手がけます。

十八世紀に産業革命に成功したイギリスは、植民地を広げ貿易で利益を上げ、太陽の沈むことのない国と謳われています。ホームズが活躍した時代は、このイギリスの黄金時代にあたります。産業



聖バーソロミュー病院につくられたホームズの部屋



ホームズ、ワトソンも散歩したハイド・パーク

や科学が発達し、鉄道の時代と言われたように国内の鉄道網が整備され、首都ロンドンでも地下鉄が開通します。一九〇一年の調査では、ロンドンの人口は四百五十万人を超え、先進的で豊かな大都市として世界に知られていました。しかし、貧富の差が広がり、多くの人や金が集まる大都市では多くの犯罪が発生するようになり、一八八八年には、人々を震撼させた切り裂きジャックのような残酷な殺人事件も起こり、犯罪への恐怖が人々の心に影を落とす時代でもありました。いつ事件にあらうかわからない漠然とした不安を抱えていた当時の読者たちは、良心によって犯罪に対峙し、鮮やかに事件を解決するホームズに、現在の私たち以上に拍手喝采をおくったことでしょう。

ホームズの物語は長く書き続けられたため、ヴィクトリア朝の古き良き時代のイギリスの雰囲気と近代の時代の流れが物語の随所に描かれています。例えば、現在では違法であるコカインをホームズは愛用していたことがあります。当時、コカインは強壮剤として最先端の薬で、普通に誰でも買うことのできるものでした。コカインの薬理作用が研究され有害であることが判明した後は、ホームズもピタリとコカイン使用をやめてい

ます。もし煙草の有害性が認められていたら、ホームズのトレッドマークであるパイプも消えてしまっていたかもしれません。

物語ではホームズがいつ生まれたのか書かれていませんが、ホームズが学生時代を送った年代から一八五〇年代半ば頃と考えられています。家族や親戚について、ほとんど書かれてなく、政府高官である七歳年上の兄・マイクロフトだけが物語に登場しています。

大学を出たホームズは一八七七年にロンドンに移り住み、探偵として開業しますが、捜査依頼がないため大英博物館の図書室に通い熱心に勉強をしています。あるとき、聖バーソロミュー病院の化学研究室で共通の知人からワトソンを紹介され、八一年からベイカー街二二一Bでハドソン夫人の下宿人として二人は共同生活を始めます。

ホームズと出会った頃、ワトソンは、ホームズを片寄った知識の持ち主として現代文学、哲学、天文学、政治の知識が皆無だと判断しますが、後に彼の広範な知識を知ることになります。

ホームズは、痩せ形で背が高く、黒い髪と灰色の目をしており、額は広く、鼻は肉の薄い鷲鼻、口は薄い唇をかたくむすび、身だしなみの趣味もよいと紹介されています。腕力があり、ボクシングやフェンシングの達人で、ヴァイオリンを演奏したり、研究論文を書くなど音楽の造詣も深い人物として描かれています。

●● 関連企画 ●●

ミニ講座

「シャーロック・ホームズとロンドン」

日時：7月3日(日)・17日(日)・24日(日)・31日(日)
各日14:00~15:00

場所：文学館ホール
講師：展覧会担当学芸員 (川島郁子)
参加：無料
定員：当日先着順50名

理知的で冷静な態度で推理し、全くの別人に変装までして捜査をすすめる、犯人の思考の裏を読んだ作戦を遂行するなど、ホームズ活躍の舞台にはロンドンの実在の場所がたくさん出てきます。そして、その多くは現在のロンドンに受け継がれ、訪れることができます。

展覧会では、建築・風景写真で活躍中の植村正春氏の美しい写真を添えた四十七点のパネルによって、聖バーソロミュー病院や、ランガム・ホテル、カフェ・ロイヤル、チャリング・クロス駅、そして架空の場所であったベイカー街二二一Bのホームズの部屋を再現したパズルや、ワトソンが記したホームズ事件記録を預けた銀行など、ホームズゆかりの地と作品を紹介いたします。

(主任学芸員 川島 郁子)

学芸員メモ

「日本探偵小説の父 森下雨村」展を終えて

「日本探偵小説の父 森下雨村」展は6月2日に無事閉幕しました。文学者としての森下雨村の業績に驚かれたり、農業と釣りの後半生に関心を持たれた方も多く、遺作『猿猴川に死す』や『釣り天国』の復刊も相俟って森下雨村へのご理解も少しずつ深まったのでは、とうれしく思っています。ご協力ご支援下さった皆様、そしてご観覧下さった多くの皆様にお礼申し上げます。

会場内に会期半ばから置かせていただいた「ご感想・自由ノート」には生前の雨村をご存知の方、初めて知ったという方、それぞれの思いやご感想が記され感慨深いものでした。

紙面の都合上、そのすべてはご紹介できませんので、その中からお一人だけ、ご本人のご許可を得てご紹介します。

(なお、このメモを記していただいたMさんは、昭和28年9月に物部川田村堰で不慮の死をとげた猿猴こと、横島義喜氏のお孫さんです。)

ただただ懐かしく拝見させて頂きました。

あの日、9月13日の事は、今でも昨日の出来事のように思い出されます。祖父母に抱かれて寝ておりました私は、あの朝、いつになく5時のサイレンに目を覚まし、祖父母を起こしました。

「今朝は寒いから綿入れのハンテンを着て川に行こうか！」

後となりました。

近所の方の知らせで、昔のことなら自転車にリヤカーをくくりつけ、両親が大

急ぎで出かけました。一刻の後でした。やはりはてた祖父が家に帰ったのは……

出かけたままの姿でした。青白くなった祖父の顔を見、幼な心にも、自分が起こしたせいで亡くなったんだと悔やまれて仕方がありませんでした。

近所の人の手により、白布の旅支度に着替えている間も祖父から離れる事ができなくて、ずっと泣いていた私でした。

当日は見送りの方々の列が道の両側に、どこ迄も続き、西の川を過ぎても並んでいました。たくさんの花輪の数に、よけいに悲しく、苦しく、つらかった記憶が思い出されます。

亡き祖母が、岩太さん、又、奥さんには、「本当に感謝せな、おじいちゃんの事を書き残してくれて、ありがたい事や！」とよく話しておりました。

戦地には、パイオリンを片手に出兵したらしい祖父。

そのやさしかった祖父に、今日、又、会えて本当にうれしく思いました。ありがとうございました。

(土佐市 M)

(森下雨村展・ご感想ノートより)

昭和21年生まれとのMさん、昭和28年の事故当時は、まだ7、8歳であられたわけです。しかしながらその朝の出来事を鮮明に覚えておられ、しかもその幼さで、ご自分が義喜お祖父さんを起こして早くに川へ行かせてしまったことに、自責の念を持たれておられたとは……

「猿猴川に死す」余話の一つとして、皆様に、また、亡き森下雨村にも知ってもらいたく、ここにご紹介しました。

さて、雨村が晩年に西谷退三の遺稿「セルボンの博物誌」の出版に力を尽くしたことも紹介しましたが、ご覧のお客様からも「雨村さんがいなかったら西谷退三も世に出なかったでしょうねえ」とか、「次はぜひ西谷退三展を」との声もあり、西谷退三ファンの確かな存在を教えられたことです。

ところで、西谷退三、本名・竹村源兵衛は、また大変な蔵書家でもありました。そのコレクションの中には、名高い黒岩涙香著訳書も含まれています。明治30-40年代の学生時代から交友のあった雨村と源兵衛。この二人にとっても黒岩

探偵小説の元祖、明治の新聞王

黒岩涙香 新収蔵資料展(仮題)のご案内

9月10日から文学館ホールで開催



黒岩 涙香 (1862~1920)

森下雨村の大先輩で、安芸市川北出身の黒岩涙香(1862~1920)の新収蔵資料展を9月10日から1階文学館ホールで開催いたします。

17歳で入学した大阪英語学校で語学の才を伸ばし、海外の裁判・探偵小説を彼独自の翻訳翻案で次々と新聞紙上に連載し

涙香の翻訳探偵小説は大変な魅力であり、その影響は十分に受けたであろうことは十分に想像されます。



企画展は終了しましたが企画展図録は840円で販売しています。

大衆小説のパイオニアともいわれる涙香。「鉄仮面」「巖窟王」「噫無情」「幽霊塔」などロングセラーの最初の紹介者でもありました。また新聞「万朝報」を通じて明治言論界に不朽の功績を残しました。今回の新収蔵資料展は、近年ご遺族より受贈した涙香関係の写真や資料をご紹介します。日露戦争日本海海戦から百年の今年、明治・大正の日本の歴史資料としても大変貴重なものです。また涙香晩年の人間的苦悩をも垣間見ることが出来るかもしれません。

土佐が生んだ明治の巨人、黒岩涙香の新収蔵資料展へも、ぜひご来場下さい。(学芸課長 別役 佳代)

第四回

岡本弥太白牡丹祭から

日本現代詩人会員 片岡文雄

ふるさとが誇る先達詩人岡本弥太（一八九九〜一九四二年）をたたえる顕彰式典「白牡丹祭（はくぼたんさい）」が今年もまた去る四月十六日、詩人の生地香美郡香我美町岸本は脇の磯の峯本神社境内にある詩碑の前で開催された。

参集の人々の数は、地元実行委員会、香我美町文化協会、町教育委員会など関係者に加えて、毎年募集される岡本弥太記念文芸賞（詩、短歌、俳句、川柳）の表彰式も兼ねるので、実行委員会の把握では、これまでで最も多いおよそ百二十名になるのではないかとのことである。ところで、碑面には詩人の代表詩集『瀧』の巻頭に配された詩「白牡丹図が、雄渾の筆致によって刻字されている。



白牡丹圖

白い牡丹の花を
捧げるもの
剣を差して急ぐもの

日の光青くはてなく
このみちを
たれもかへらぬ

岡本 彌太

光太郎書

右の印字でようく注意して見なければならぬことがある。白牡丹図の図は旧漢字ハ圖Vで、弥太の弥もまた旧漢字ハのみちVのハのVは変体仮名でハかへらぬVのハへVは旧仮名を充てている。こうしたことは何に由来するのかといえは、揮毫者が、当用漢字、新かなづかい採択以前にあった人だと見なければならぬ。それは、左下に詩の作者、岡本弥太とあり、さらに左下に小文字でハ光太郎書Vと筆名されていることで、揮毫者の名が明かされているわけである。ここで詩碑を魅入る人々は、これが高村光太

郎の筆跡であることに瞭目させられる。南海の僻遠のわがふるさとで、大詩人の文字を目の当たりする衝撃に打たれるはずである。

たとえ弥太詩がその詩心の厳肅さを保ち、表現力の高さを備えていようと、そのことを認知し、かたちにする人が居なければならぬ。それがこの詩碑ではあるまいか。

はじめに少しふれたことであるが、わたしたちは地元高知にあつてひろく詩歌の作品を募集し、先達詩人への顕彰と、後に続く人々への奨励を図っている次第である。

ここに参考までに、第3回（16年度）と第4回（17年度）の応募作品数の相对比较、変動を表にして示してみたい。左の表に高校の部が無いのは、最初から排除している訳ではなく、募集につ

ての周知が徹底していないことを物語るものである。白牡丹祭の実行委員会では、来年度は町村合併による香南市が発足する予定なので、その新市のスタートに期待して高校の部門をも加えていきたい、という。

しかしこれまでも各部門ともに小学、中学の児童、生徒の参加にみられる学校関係者の協力が大きいことを見落とせない。それに短歌の選者である佐藤いづみ先生、俳句部門の橋田憲明先生、川柳部門の曾我部佳風先生による各部門の先生方のご苦勞をも忘れることはできない。来年度の岡本弥太白牡丹祭の募集要項は、新市がスタートする予定の香南市の白牡丹祭実行委員会、高知新聞社学芸部までお問い合わせいただきたい。

（二〇〇五・四・二〇記す）

部 門		第3回 16年度	第4回 17年度	第4回表彰作品
詩	小学の部	85	187	入選1、2、3席、佳作5
	中学の部	17	58	入選1、2、3席、佳作5
	一 般	19	15	入選1、2、3席、佳作3
短歌	小学の部	48	43	入選1、2、3席、佳作7
	中学の部	40	185	入選1、2、3席、佳作7
	一 般	62	50	入選1、2、3席、佳作6
俳句	小学の部	46	235	入選1、2、3席、佳作5
	中学の部	58	46	入選1、2、3席、佳作5
	一 般	68	52	入選1、2、3席、佳作5
川柳	小学の部	21	194	入選1、2、3席、佳作7
	中学の部	25	7	入選1、2、3席、佳作無
	一 般	48	53	入選1、2、3席、佳作5
合計		537	1,125	

四万十川ほとりの「昭和」

― 笹山久三のふるさと ―

猪野 睦

四万十川が日本最後の清流といわれ始めたのは、いつ頃からだったろうか。たしか高知県が四万十川対策室を設置したのは、十年ほど前だった。都会からのカヌー下りの若者がふえ、四万十川はテレビでも、レジャーの名所として知られていった。

笹山久三の自伝小説「四万十川―あつよしの夏」が第二十四回文芸賞をうけ、季刊『文芸』に載ったのは一九八七年だった。最初これを読んだとき、捨て猫をかばい飼い、学校でいじめに会う少女を守る少年の日々をかきあげた、なんとという新鮮な作品かという印象が残った。

以降続けて笹山久三は、その少年篤義の成長を、地元高校を出て都会へ出、やがて労働運動にたずさわる青年期までを、心のなかを流れる四万十川とともに六部作に仕上げた。

四万十川中流のほとりでウナギ、アユをとり、宇和島から仕入れる行商で暮らしをたてる一家を西土佐村を中心に書いた。コロバシでウナギをとり、アユ、カニとりで生計をたてた四万十川であったが、都会へ出た笹山久三は戦場の合理化の波にさらされる現実に向き合う。その現実を国鉄分割・民営化過程を扱った『飢餓船』に書き、みずからの職場郵便局の実態を『郵便屋』『郵便屋の涙』に書き上げた。郵便配達に追われる苛酷な職場の実態をえぐる本格的な作品だった。

『四万十川』六部作は十年あまりかけた作品だったが、そのあと九六年から九九九年にかけて『母の四万十川』三部作を仕上げている。「さいはてのうたがきこえる」「それぞれの道」「かたすみの昭和」である。ここで書いたのは太平洋戦争期から敗戦後にかけての村の歴史、もう忘れられ語られず、戦後世代には伝わっていない貧しい村の「昭和」の掘り起こしだった。

笹山久三のふるさと、当時の江川崎村、津大村だった西土佐村は耕地の少ない喰え

ない村だった。そこへ満州開拓移民が回策に沿う「経済更生計画実行協議会」の名でおびてくる。これにより分村計画が始まり、一家あけての分村開拓移民が、吉林省権甸県大清溝などへおこなわれていった。犠牲は大きく、敗戦時の分村出発団員三六五名中帰村者は八二名だったと、西土佐村満州開拓団の記録「さいはてのいばら道」に出ている。

この清流の四万十川のほとりから、なぜ分村移民が始まったのか、そして二割あまりの帰村者たちは、帰村後、村でどう自立更生をたどっていったか。それを笹山久三は、父母の眼を通して捉えあげていった。帰村者のなかには九州炭坑へ行く者、ブラジルへ行く者などさまざまであるが、村にもやがてパブルがはじけ不況の時代がやってくる。炭焼きと川漁で生計をたてていた者も、その後上建資本の開発に雇われるようになっていく。

村では栗林をつくり、シイタケ栽培、野菜作りと工夫していくが、村は時代に押し流されていく。笹山久三が戦後半世紀をみつめ「昭和」を問い書き上げた『母の四万十川』だった。

満州引き揚げ、開拓団悲劇を書いた作家も多いが、多くは悲劇にとどまった。笹山久三は村の歴史を書く中で、開拓帰村者の自立過程、なぜ分村移民だったのかというその後の暮らしを追った。ほとんどの作家が扱わなかったテーマだった。笹山久三のふるさとと歴史を見つめる眼が書かせた仕事だった。

先日、窪川から入り、十川、先ごろ四万十市になった西土佐村を通り、これまた四万十市になった中村へと、四万十川沿いに走った。車窓には濃緑が映え、アユ釣りが見え、カヌー下りの若者の集まりが見えた。この川沿いの忘れられた時代を笹山久三は、じっくり残る名品に刻みこんだのかとあらためて思った。

資料受贈報告

(平成十七年三月～平成十七年五月)

敬称略

▼氏原富士子「植木枝盛と育幼論 森岡和子 高知市立自由民権記念館友の会」▼横田晴光「仁淀川 宮尾登美子 新潮社」他▼吉野節子「をみなごをみな 吉野節子 ながらみ書房」他▼妻島季男「空海の軌跡 佐和隆研 毎日新聞社」他▼篠田たけし「句集」有心 篠田たけし 文学の森」▼ふたば工房「カシオペア2005 カシオペア20005 世話人の会編刊」▼小学館「釣りは天国 森下雨村 小学館」▼高知ペンクラブ「高知文芸年鑑 18号 高知文芸年鑑編集委員会 高知ペンクラブ」▼ひまわりの会「ひまわり(雲母会員エッセイ集) 1集 ひまわりの会編刊」▼山本清水「青春の遺書 鳴岡晨 國文社」他▼中山一志「俳誌「龍巻」二「ホトトギス」二「芹」のバックナンバー 計一〇七一冊」▼今井正子(坂本昭田蔵)「維新経済史の研究 平尾道雄 高知市民図書館」他▼坂本昭(一九一三～一九七八)は参議院議員、高知市長、医学博士。大正二年七月、傍士龍二、茂登恵の長男として三重県宇治山田市曾根町(伊勢市)に生まれました。父は中等学校の英語教師。母方の姓を継ぎ坂本姓となります。大連第二中学校を経て昭和五(一九三〇)年高知県立城東中学校(追手前高校)四年修了。八年旧制高知高等学校卒業後東京帝国大学医学部に進み十二年卒業、付属病院副手となります。十三年七月北支方面軍医部の伝染病対策に応じ嘱託医として中国大陸へ渡り十六年十月応召。二十一年七月復員。二十二年四月高知市池に開設された「国立高知療養所」の所長に



四万十川

◆◆◆ 文学館日誌 2005年3月～2005年5月 ◆◆◆

3月

◆1日 森下雨村遺族：森下時男氏他4名来館。◆4日 中土佐町矢井賀婦人学級24名観覧。◆5日 田中貢太郎遺族：田中道夫御夫妻他1名来館。◆6日 N H K文化センター高松支社37名観覧。◆9日 グループホームセゾン薊野長寿者5名、介護者4名観覧。◆11日 『蔵』ビデオ上映会。参加者71名。◆12日 『蔵』ビデオ上映会。参加者40名。／語りと紙芝居の会5名。／『宮尾登美子の世界』展ギャラリートーク参加者25名。◆13日 『蔵』ビデオ上映会。参加者50名。◆15日 宮尾登美子展5千人日来館セレモニー。◆16日 文学館運営協議会13名。◆17日 高知市長来館。◆19日 第59回朗読の会。郷土の作品を読む1 第一部『四方十川あつよしの夏』より、第二部『茶歩林亭』参加者52名。◆20日 「宮尾登美子の世界」展ギャラリートーク参加者35名。◆21日 「宮尾登美子の世界」展終了。入場者7,079名。◆25日 北高知婦人学級25名観覧。

4月

◆2日 「国宝と重要文化財」開幕5/29まで。オープニングセレモニー高野切巻20実物展示(4/2/4/10)。◆6日 毎週水曜日、開館時間2時間延長。◆13日 毎週水曜日、開館時間2時間延長。◆16日 第60回朗読の会「花二題」「しだれ櫻」。「竹の花」高知城ホール2階。参加者55名。◆20日 毎週水曜日、開館時間2時間延長。

◆21日 「森下雨村」展開幕。オープニング記念行事「階ロビー」。アン・ヒラマツ氏。マリ・ヒルボーン、グレン・ヒルボーン御夫妻、



森下雨村展のオープン行事で (2005. 4. 21)

森下時男氏、他遺族の方、佐川町教育委員会 竹村脩氏、西村毅氏列席。◆23日 記念講演会「森下雨村を語る」講師：森下一仁氏、湯浅篤志氏。高知城ホール2階。参加者69名。◆24日 雨村ギャラリートーク参加者6名。◆26日 高知追手前高校42名観覧。／高知コンベンション協会2名観覧。◆27日 高知追手前高校 午前9名、午後41名観覧。／旅行者者16名観覧。／毎週水曜日2時間延長。◆28日 文化厚生委員会。◆29日 毎週水曜日、開館時間2時間延長。◆30日 開館時間8時30分～18時まで時間延長。／第1回目専門講座「モンタニョーラのヘッセ」講師：コディネーター 高松源一郎氏。高知城ホール2階。受講者73名。

5月

◆1日 開館時間8時30分～18時まで時間延長。／横島公臣氏来館。◆2日 開館時間8時30分～18時まで時間延長。◆3日

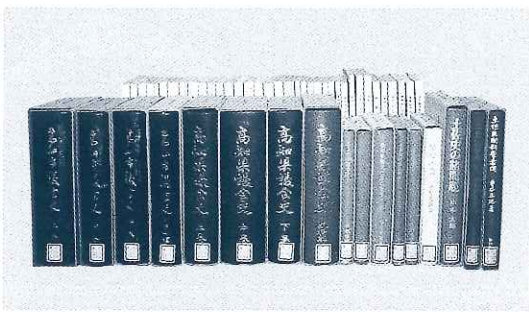
開館時間8時30分～18時まで時間延長。／雨村ギャラリートーク5名。／森下淳也氏来館。◆4日 開館時間8時30分～19時まで時間延長。◆10日 稲生ふれあい教室46名、引率者1名観覧。◆11日 雨村ギャラリートーク3名。／JTB旅行者13名観覧。／毎週水曜日2時間延長。◆12日 横島公臣氏のご息女来館。◆14日 「語りと紙芝居の会」5名。高知城ホール2階。◆15日 雨村ギャラリートーク14名。／横島公臣氏とお姉様御夫妻、山本有光御夫妻来館。◆16日 マツザカヤ友の会25名観覧。◆17日 森下時男氏御夫妻、松井謙介氏御夫妻来館。◆18日 雨村ギャラリートーク3名。／毎週水曜日2時間延長。◆19日 愛媛県知事御夫妻、高知県知事御夫妻来館。／歴史民俗資料館館長来館。◆21日 第61回朗読の会「青葉の季節」第一部 猿猴川に死す「博労の宿」、第二部 少年小説「少年探偵 富士夫の冒険」高知城ホール2階。参加者31名。◆25日 雨村ギャラリートーク3名。午後17時30分～18時30分。／野市史談会25名観覧。◆26日 菊池寛記念館。36名観覧。◆27日 谷俊広氏がご家族の皆様と来館。◆28日 第2回専門講座「ドイツ文学とヘッセ」講師：愛媛大学法文学部教授 安藤秀國氏。受講者75名。◆29日 雨村ギャラリートーク27名。／「国宝と重要文化財」終了。

6月

◆2日 「日本探偵小説の父 森下雨村展」終了。同展観覧者1,858名。明治大学教授 山泉進氏来館。

就任し当時亡国病とまで言われた結核の治療と予防に尽力しました。二十五年三月医学博士。二十七年一月結核撲滅対策に寄与した功績により「高知新聞文化賞」を受賞しました。三十一年四月国立高知療養所長を辞任、同年七月行われた参議院議員選挙に当選し一期務めます。四十二年一月高知市長となり五十三年十月病気のため辞職するまで三期務めました。この間、地方自治の確立と市民参加を基本として、防災・福祉・環境・教育・文化を重視する人間中心の都市づくりに情熱を注ぎました。また、読書と音楽を愛し、自らの基本的な生き方として哲学(フィロソフィ)・詩情(ポエム)・開拓者精神(バイオニクススピリット)の「三P主義」を唱え人生哲学としました。著書に『忘れぬ人々』『人間でよかった』『自由と民権』『坂本昭集』などがあります。五十三年十二月病没。六十五歳。

このほか、全国の個人、関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼申し上げます。



坂本昭旧蔵図書 (一部)

2005年
7～9月

7月—July

8月—August

9月—September

● 平成17年度 専門講座 ●

高知県立文学館では、日本におけるドイツ年である今年2005年10月7日(金)～11月20日(日)まで「ヘルマン・ヘッセ」展を開催いたします。つきましては、展覧会に先立ち、専門講座を開催してまいります。講師、日程は下記の通りです。

- ◇第4回…7月23日(土)「ヘルマン・ヘッセ」—作品の変容—
・講師：瀬戸武彦氏(高知大学人文学部人間文化学科 教授)
- ◇第5回…8月27日(土)「ヘルマン・ヘッセ」—内面への道—
・講師：瀬戸武彦氏(高知大学人文学部人間文化学科 教授)
- ◇第6回…9月24日(土)「片山敏彦とヘルマン・ヘッセ」
・講師：永田和子氏(元 高校教諭)

・7月、8月は聴講いただけます。文学館にお問い合わせください。

※各回13時30分～15時

<場所> 7月、8月 (文学館1階ホール)
9月 (高知城ホール)

第8回 児童生徒文学作品朗読コンクール

◇地区審査(県内3会場)

※申込締切 7月31日(日)

- ・大方会場 8月20日(土) 大方あかつき館
- ・安芸会場 8月24日(水) 安芸市民会館
- ・高知会場 8月26日(金) 高知県立文学館

◇県審査(公開)・記念講演会

<日時>11月27日(日) 13時～16時

<場所>高知県立文学館 1階ホール

記念講演会

講師：小林豊先生(日本画家)

「せかいいち美しいぼくの村」の作者

演題：「アフガニスタン、ぼくの旅と絵本」

「シャーロック・ホームズの倫敦」写真展

6月25日(土)～8月14日(日)

●世界で最も有名な私立探偵シャーロック・ホームズ。彼が活躍した19世紀ロンドンの面影は壮麗な建物や町並みに今も伝えられています。

●ホームズゆかりのロンドンの建物や公園などを、建築・風景写真で活躍中の植村正春氏の美しい写真で紹介。

<料金>一般350円(常設展含む)
20名以上の団体は280円。

<場所>高知県立文学館企画展示室

■関連行事

7月9日(土) 午後のひととき 開場13:30 開演14:00
夕べのひととき 開場18:00 開演18:30

<場所>喫茶メフィストフェレス3F(高知市帯屋町2-5-23)
申し訳ありませんが、3階までは階段のみでございます

<出演>武中淳彦氏(ヴァイオリン)
大野日菜氏(ピアノ)

<定員>各回60名

<入場料>お一人1,500円(お茶とお菓子付き)

<主催>「シャーロック・ホームズと音楽」実行委員会

■お申し込み、お問い合わせは、高知県立文学館まで
TEL088-822-0231 bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp

■ミニ講座(文学館ホール)

担当学芸員によるミニ講座「シャーロック・ホームズとロンドン」を行います。

7月3日(日)、17日(日)、24日(日)、31日(日) 午後2時～3時

【休館日】7月—4, 11, 19, 25日 8月—1, 8日 9月—無休

●土佐山内家宝物資料館の展示●

「お殿様の本棚—山内文庫の世界I—」

6月3日(金)～8月14日(日)

※入場無料

探偵小説の元祖、明治の新聞王

黒岩涙香 新収蔵資料展(仮題)

9月10日(土)～10月16日(日)

<観覧料>一般350円(含常設展) <場所>1階ホール

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(休日・祝日の場合はその翌日)
年末年始(12月26日～1月1日)

観覧料 一般350円
特別企画展のあるときは、料金が変わります。[上記参照]
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県(市)長寿手帳所持者及び身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳所持者とその介護者1名は無料です。

駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

交通のご案内



- 高知空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分

高知県立
文学館

高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857
〒780-0850